

## 日本の大学図書館におけるラーニング・コモنزの現状

松野 辰彦

本研究では日本の大学図書館におけるラーニング・コモنزの現状を明らかにすることを目的とする。現在、ラーニング・コモنزに対する明確に定まった定義はない為、本研究では既存の定義を整理し、ラーニング・コモنزを「学生の自主的な学習を支援するためのサービス・資料・設備を総合的にワンストップで提供している空間」と定義した。ラーニング・コモنزの設置開始時期は明らかではないが、前身であるインフォメーション・コモنزは、1990年代以降、北米において設置が行われ始めている。

日本のラーニング・コモنزの状況に関して大学図書館全般に対して調査を行った研究はないことを踏まえ、日本の大学図書館におけるラーニング・コモنزの現状を明らかにする為に、本研究では質問紙調査を行った。調査対象を日本全国の四年制大学・大学院大学の図書館 755 館とした悉皆調査である。調査対象館は、各大学の中央館・本館的機能を担っている図書館とし、一大学につき一図書館を対象とした。調査期間は 2010 年 7 月 26 日から 2010 年 12 月 24 日である。質問紙の回収率は 69.4%であった。質問項目は大きく分けて、大学図書館における学習支援の状況、ラーニング・コモنزの設置に関する状況、ラーニング・コモنزに必要なと考えられる要素の 3 点である。

1 つ目の「大学図書館における学習支援の状況」では、資料の整備やコンピュータ、ネットワークへの接続を備えたデジタル環境の構築は高い割合で行われているものの、他部署との連携は少なく、学生に対する幅広い支援の提供は少ないということが明らかになった。

2 つ目の「ラーニング・コモنزの設置に関する状況」では、回答館 513 館のうち、現在ラーニング・コモنزの設置を行っている回答した図書館が 78 館 (15.2%) であった。更に、この中から本研究において定義するラーニング・コモنزにあてはまるものを抽出した結果、18 館 (3.5%) のみが該当した。このことから、文献調査において見られるラーニング・コモنزの定義と、日本の大学図書館においてラーニング・コモنزだと考えられているもの間には差があると考えられる。日本の大学図書館におけるラーニング・コモنزの特徴としては、新築・改修工事をきっかけとして設置されることが多いこと、その時期は 2000 年以降、特に 2007 年以降に集中していることが挙げられる。また、専任のスタッフが配置されることも多く、「ヘルプ・デスク」、「談話可能スペース」、「学生に焦点をあてたサービス」の提供は 7 割以上であり、学生の学習を支援しようという意識が高い。一方で、「飲食可能スペース」や「授業との連携」を行っているところは 2 割に満たず、北米のラーニング・コモنزとは異なる特徴が見られた。

3 つ目の「ラーニング・コモنزに必要なと考えられる要素」では、ニーズの把握、学生に焦点をあてたサービスの提供が、特に大学図書館において必要だと考えられていた。

(指導教員 呑海沙織)